

# WISS論文タイトル（デモ・ポスター・ロングティザー発表用テンプレート）

鈴木 太郎 \*† 高橋 花子 ‡ 佐藤 次郎 § 田中 三郎 ¶ 渡邊 四郎 || 伊藤 五郎 \*†‡§¶

# 1 はじめに

この L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2 <sub>$\epsilon$</sub>  用スタイルクラスは、 WISS 2023 における論文投稿用である。2014 年からは Word テンプレートを用意した。著者各位においては、 WISS のホームページ [2] および以下の注意を熟読して効率的な論文執筆をされるよう望む。やむをえず他の手段で原稿を書く場合は、限りなく同じ形式に仕上げること。著しく異なる形式の場合、不採録の理由となる場合がある。

## 2 論文執筆について

## 2.1 全般的な注意事項

このスタイルクラスを利用するには、`wiss.cls`, `wissbase11.cls`, `jwiss bst`をコンパイラが参照できるパスに置く。通常は TeX 文書ファイルと同じディレクトリに置けば自動的に参照される。また TeX 文書の先頭にある`\documentclass`で `wiss`を指定する。全体としては右の枠線内のようになる。

論文の文体は「だ」「である」調、句読点は「,」「.」を強く推奨する。図のレイアウトなどの特別な場合を除いて本文は2段組とする。原稿はA4 サイズ pdf 出力し、上下左右のマージンは厳守しなければならない。また、ページ数は必ず規定のページ数でなければならない（詳細は査読方針 <https://www.wiss.org/WISS2023/review-policy.html> を参照）。

Overfull(規定の枠内からはみ出して文字を書くこと)してはならない。本文中や参考文献で長いURLなどを書き入れると、<http://www.sample.url.xx.yyy/>のようにOverfullが発生することがある。必ず仕上がりを確認し、このようなことが起きないように文章を調整する。URLの場合は\url{}を使うことによって適切な個所で改行される。はみ出した部分については編集者において削除がある。

```
\documentclass[twoside]{wiss}
.....
\journalhead{...}
\begin{document}
\title{...}
\etitle{...}
\author{...
    \affil{...}}
\begin{abstract}
....
\end{abstract}
\maketitle
\section{...}
本文...

\bibliographystyle{jwiss}
\bibliography{...}

\begin{figure*}(!b]
未来ビジョン関連の latex 記述
\end{figure*}
```

## 2.2 表題、著者名、著者所属、概要

和文タイトルを\title{}と\journalhead{}の両方に書く。 \journalhead{}に書かれたタイトル

\* ○×大学

○八文字  
† 株式会社○○

株式会社  
† Q△大學

§ OA大学

株式会社○○

深式云往

は3ページ目以降の奇数ページのヘッダ（ハシラ）として現れる。この際、必ず表題と同じになっているかを確認すること。また、1ページ目のタイトルは右側の余白にはみ出さないように注意する。

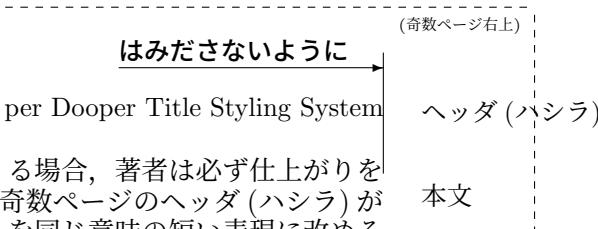


図 1. ヘッダの例

原稿を作成する場合、著者は必ず仕上がりを確認する。3ページ以上の原稿については、3ページ目以降の奇数ページのヘッダ（ハシラ）がページ幅を越えないように適切な長さのタイトルを付けること。ヘッダ（ハシラ）は途中で改行してはならない。また、\journalhead{}の中を空にしてはならない。なお、ページ番号はページ下部中央に書き込まれる。

シングルブラインド査読のため、投稿時に著者名、所属を記入すること。著者名の姓と名の間には半角スペースを入れ、著者名の区切りはタブまたは2文字以上の全角スペースを用いる。カンマ区切りではないので注意。所属名をマークごとに1p目左下「Copyright is held by the author(s).」の次の行に記入する。英文名を併記する必要はない。著者の所属が著者によって異なる場合は、上付き文字でマークをつけ、また、全著者の所属が同じ場合は、マークを付ける必要はない。

アブストラクト（論文概要）は、\begin{abstract} と \end{abstract} の間に、400文字程度の和文で書く（英文は2012年で廃止）。「概要.」と概要本文の間は改行せず、一続きで書く。

### 2.3 本文

\section{}, \subsection{}など、スタイルクラスで用意されている章立てを用いながら、通常の L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>&</sub> 文書執筆の要領で書く。

誤字脱字や参照の不一致が散見されるなど、最低限の推敲が為されていないと判断された場合、査読を行わずに不採録となる場合がある(Quick Reject)。共著者によるチェックも投稿前に受け、十分にチェックの上投稿すること。図表については十分な画質があるよう著者において出力すること。なお、写真などもすべて原稿中に組み込んで出力すること。

### 2.4 参考文献

参考文献は、本文で「文献[3][4]で…」というようにカッコ書きで引用し、文末に参考文献リストを作成する。本文中では参考文献リスト中の\bibitem{}

をキーにして、本文中に\cite{}と記述することで引用することができる。

例) 参考文献リストにおいて  
\bibitem{rekimoto2000}と記述した場合、  
本文中に\cite{rekimoto2000}と記述すると  
[3]と表示される。

参考文献リストは JBIBTeX を用いて文献データベースから自動生成することを強く推奨する。文献スタイルは jwiss を使う。手書きで作成する場合には、文末の例のように著者名、論文名、所収冊子名(英文の場合には斜体)、ページ番号、発行年を書く。英文で著者名を書く場合には、名(first name)のイニシャル、姓(last name)の順に書く。共著者が多い場合には「et al.」で省略してもよい。このテンプレートでは、同梱の wiss\_template.bbl が参考文献リストになっているので適宜参照のこと。英語の文献リストの書式としては IEEE style manual が詳しい。

なお、参考文献に URL を指定する場合には、そのページが存在していることを投稿前に必ずもう一度確認し、参照日を記載する。本来、ニュース記事のように短い期間で URL が変更されたりページ自体が消滅する恐れのある Web ページは参考文献として好ましくない。

## 2.5 未来ビジョン

未来ビジョンについては、必須とせず任意とする。論文本体とは別に、「この研究はどういう未来を切り拓くのか」について、著者の視点からアピールしたい点があれば、最終頁に欄を設けて設けて自由に議論する。外枠の大きさはページ下余白から最大93mmの範囲であれば、ある程度改変してもよいものとする。

## 3 論文作成の例

\section{論文作成の例}と書くと上のように表示される。

### 3.1 図表挿入の例

\subsection{図表挿入の例}と書くと上のように表示される。

#### 3.1.1 表の例

\subsubsection{表の例}と書くと上のように表示される。表1は表の例である。

#### 図の例

\subsubsection\*{図の例}と書くと上のように表示される。アスタリスク(\*)をつけたことにより番号が表示されない。図2は論文中に図面を挿入した例である。



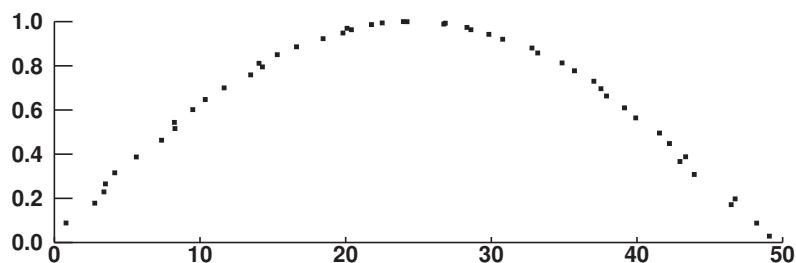


図 3. グラフの例

すとてすと. てすとてすとてすとてすとてすとてす  
とてすとてすとてすとてすと.

文章量が増えると、本文と未来ビジョンが重なるため、重ならないように文章量を調整すること。

参考文献

- [1] IEEE Style Manual.  
[http://ieeeauthorcenter.ieee.org/wp-content/uploads/IEEE\\_Style\\_Manual.pdf](http://ieeeauthorcenter.ieee.org/wp-content/uploads/IEEE_Style_Manual.pdf).
  - [2] WISS 運営委員. WISS ホームページ.  
<http://www.wiss.org/>, 2017.
  - [3] 厲本 純一. まえがき: WISS2000について. インタラクティブシステムとソフトウェア VIII, pp. i-ii. 近代科学社, 2000.

未来ビジョン

(本行を含む下記の説明を削除してから、記入すること。)

未来ビジョンについては、必須とせず任意とする。論文本体とは別に、「この研究はどういう未来を切り拓くのか」について、著者の視点からアピールしたい点があれば、このような欄を設けて設けて自由に議論してよい。例えば、「こういう未来社会が到来して欲しいから、我々の研究でこう貢献していきたい」、「主張が大きすぎて本文中では書きにくかったが、この研究は、実はこういう気持ちで研究している」、「現在の実装では、小さいトピックであるかのように誤解を招きやすいが、本当はこういう大きなことを狙って、その第一歩として研究に取り組んでいる」のように、研究の未来、魅力を語る場として利用できる。大きさや形

状はこのサンプルを目安とするが、この枠内であればある程度改変してもよいものとする。

てすとてすとてすとてすとてすとてすとてすと  
すとてすとてすとてすと. てすとてすとて  
とてすとてすとてすとてすと. てすとてす  
とてすとてすとてすとてすと. てすとてす  
とてすとてすとてすとてすと. てすとてす  
とてすとてすとてすとてすと. てすとてす  
とてすとてすとてすとてすと. てすとてす  
とてすとてすとてすとてすと.